

東京大学 生産技術研究所 DLXデザインラボ チーム

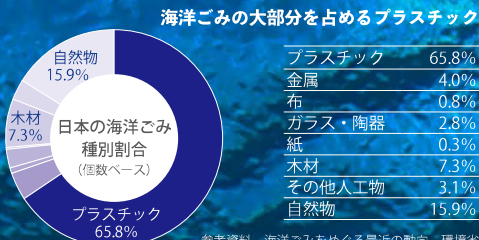
木下晴之（写真の左から2人目）
東京大学 生産技術研究所 特任助教

大規模海洋観測プロジェクト OMNI

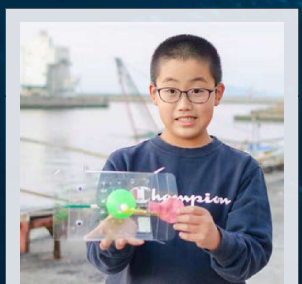
OMNIプロジェクトでは、低コストで構築・運用できる自由度の高い海洋観測システムを開発し、多様な海洋データを詳細かつ大規模に収集することを目指しています。今回のワークショップは、愛媛県の官民共創デジタルプラットフォーム事業にて実現しました。



粉々になって小さくなっている
海洋マイクロプラスチックごみ



参考資料 海洋ごみをめぐる最近の動向 環境省 (H30.9)



工作したジンベエザメロボット
を手にする松本公之輔さん
(川之江小学校5年生)

海のごみが魚に影響することは知っていたけれど、マイクロプラスチックごみの事は今回初めて学びました。今後、海のごみ拾いのボランティア活動があれば、ぜひ参加して、自分にできることから始めたいです。

プラスチックごみを減らす装置を考
えてみようと思いがけました。

そこで、ラボチームは、小学生に
プラスチックごみを減らす装置を考
えてみようと思いがけました。

できることを始める

プラスチックは安価で、便利なものであるが故に、日常から急に難しくすることは困難です。しかし、ごみを減らすこと、むやみに捨てないことなど、私たちができることはあるはず。自分たちのため、未来の子どものため、美しい海を残しましょう。

川↓海↓魚、やがて人

海洋プラスチックごみの多くは、人間が捨てたごみです。捨てられたごみは、川から海へ流れます。やがて、紫外線や波の作用などでプラスチックは劣化して粉々になり、5ミリ以下のマイクロプラスチックごみになります。

ワークショップでは、食物連鎖によりマイクロプラスチックごみをエサと勘違いして食べた小魚よりも、その上位の生物ほど体に含まれるプラスチック濃度は濃縮されているという深刻な現実を説明。

そして、マイクロプラスチックが生物や人体に及ぼす影響を指摘する一方で、学術的に未知の部分もあると話していました。

自由な発想と発明

子どもたちは、海ごみを減らすための装置を考え、浮かんだアイデアを画用紙にスケッチ。次に、主催者が用意した割りばしやスポンジ、風船、紙コップなどの小道具を使って、装置をデザインするという、アイデアを発明するためのプロセスを体験していました。



10/29（土）、県漁協川之江支所前の海で海ごみを減らす作品を披露する小学生たち

14 海の豊かさを増やす
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
問い合わせ先
政策推進課 28-6005

OMNI 海ごみプロジェクト 海ごみアイデア 発明ワークショップ

未来に美しい海を… 海洋プラスチックごみを考える



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

エールラボ エぬめ
官民共創デジタルプラットフォーム



四国中央市
SHIKOKUCHUO CITY

プラスチックごみ問題

みんなの海が
ごみで溢れるかも…

毎年、世界各国から800万トン以上のプラスチックごみが海に流れ出ていると推計されています。一日に換算すると、乗用車約1万5千台分という量のプラスチックごみが世界中の海に流れ続けていることとなります。

日本からは毎年2〜6万トンが流出していると言われて、約30年後の2050年には、海の中のプラスチックの重量が魚の重量を超える可能性があります。

東京大学×四国中央市

10月29日（土）、海洋マイクロプラスチックの研究に取り組み「東京大学生産技術研究所のDLXデザインラボ」と本市が共同で、小学生を対象とした「海ごみアイデア発明ワークショップ」を開催しました。会場は、海が間近に見える県漁業協同組合川之江支所。

市内から11名の小学生が参加し、子どもならではの自由な発想とアイデアで海ごみを減らす装置をイメージし、形にしてみることをゴールに設けました。